日本の女性ミステリ作家と図書館

——加納朋子・若竹七海のケースについて 図書館はどうみられてきたか・3——

佐 藤 毅 彦

Images of the Library, 3

—— How Have Japanese Woman Mystery Writers Depicted Libraries? The Case of KANO Tomoko and WAKATAKE Nanami

Takehiko Sato

Abstract : These papers consider how libraries and librarians are depicted in the works of Japanese woman mystery writers. This time KANO Tomoko and WAKATAKE Nanami are made the targets of analysis. Libraries of various kinds and purposes are described in a number of their works. Many librarians are shown as not having an attractive existence. As a result, the reader is not shown a favourable image of library staff.

The level at which the library is recognized in society is depicted as low, and it cannot be said that it corresponds to the degree of specialization actually required of library staff in Japan. Yet the understanding of the people who use library facilities and the way the life of the library is shown do show some degree of depth. One side of the library image becomes clearer when we examine these mystery stories.

要旨：日本の女性ミステリ作家の作品に描かれている図書館・図書館員について分析した。今回取り上げたのは，加納朋子・若竹七海である。作品にはさまざまな図書館利用形態が描かれている。また，多くの図書館員が登場するが，魅力的な存在となっている例は少ない。結果的に読者の図書館員に対するイメージは，よくないものとして印象に残ることになる。

日本では図書館に対する社会的認識は低く，図書館員の専門性についての理解は進んでいないと言わざるをえない。図書館のイメージは，図書館活動を支える住民の意識と関係が深い。ミステリ作品を検討することで，図書館のイメージの現状について，ひとつの側面を明らかにした。

1. はじめに

樋口一葉は，その日記の中で，当時の国立の東京図書館（明治十八年に，上野へ移転）を利用したことをしばしば書いている。そのうち，（明治二十四年）八月八日の記述では，「いつ来てみても，男子は多いけれど，女子で来ている人が，ほとんど一人もいないということは，奇妙なことである。そうなのに，多くの男子に交って，借りる書物の名を書き，その番号を調べたりしてカウンターへ持っていったのであるから，記入が違っている，今一度書直して来なさいと言われると，恥しさに顔がほてって，からだも震えそうである。まして顔を見ながら何かひそひそ話などされているのを見ると，心も消えるような思いで，汗びっしょり，書物を調べる気持ちもなくなってしまいそうである。」（訳：西尾能仁）[1]と述べている。（引用注・このとき一葉は二十歳）

「ほとんど男ばかりのところでのこととて一葉が目だって注目されているのを気にしてのことである。」（西尾能仁による脚注）[2]という部分は，図書館の利用者自体が限られた人たちでしかなかった時代，女性の

利用者はほとんどいないといってもいいくらいに少なかったことをうかがわせる。こうした状況は，現代においては，かなり様変わりしてきている。利用者は多様化し，女性と図書館とのかかわりも変わってきた。女性が図書館を利用することは，もはやめずらしいものではなくなり，また，職員としても多くの女性が勤務する図書館の光景はごく日常的なものになってきている。

「図書館はどうみられてきたか」というテーマでは，先に，日本のミステリ作家と作品の中に描かれている図書館との関係について，複数の作品に図書館や図書館員を登場させている書き手として，東野圭吾・法月綸太郎をとりあげて分析した[3]。また，前回は，高視聴率を記録した，テレビドラマ『ビューティフルライフ』の図書館観について検討した[4]。その中でとりあげた図書館や図書館員が登場するテレビドラマは，1979・1980年に放映された『阿修羅のごとく』（NHK）をはじめとして，1992年の『素顔のままで』（フジテレビ），2000年の『ビューティフルライフ』（TBS）など，いずれも女性の脚本家がストーリーづくりを手がけた，女性の図書館員が登場する作品であった。

今回は，日本の女性のミステリ作家で，比較的若い世代に属し，図書館を複数の作品に登場させている，加納朋子・若竹七海をとりあげ，それらの作家が作品の中で図書館・図書館員をどう描いているかについての分析を試みた。日本の図書館の状況は，地域的な違いはあっても，1970年代から80年代にかけて，提供される資料の面でも，利用者層の面でも，大きく変化していった[5]。そうした時期に学生時代を送り，図書館との関わりを体験した女性ミステリ作家が，自らの作品の中で，図書館や図書館員をどう描いているかを分析することにより，「図書館はどうみられてきたか」についての一端を明らかにすることができると考えた[6]。

2. 加納朋子と図書館

加納朋子は，1966年，福岡県北九州市生まれ。文教大学女子短期大学部文芸科を卒業後，化学メーカーに勤務しながら，『ななつのこ』で第三回鮎川哲也賞を受賞[1]，『ガラスの麒麟』で日本推理作家協会賞（短編および連作短編集部門）を受賞している[2]。

『ななつのこ』は，加納朋子のデビューのきっかけとなった作品で，短大生「入江駒子」をヒロインとする，連作短編集である[3]。駒子は，四人兄弟で，両親と「姉，次女の私，弟，一番下の妹」（p. 81）という家族構成になっている[4]。

性格・行動については「今の私を知っている人は，きっと誰も信用しないに違いないが，昔の私は，本当におとなしく内向的な子供だったのだ。」「いつも本ばかり読んでいた。でなければ，文字通り夢みたいなことばかり空想していた。」（p. 179）また「本屋で買うものといえば文庫本であり，ハードカバーの立派な本は図書館で借りるか古本屋で買う，というのが私の常識なのだ。」（p. 20）とあり，図書館の利用を日常的に経験していることがわかる。短大生ということもあって「四時限目にはゼミをひかえていたので，学校の図書館で下調べをしておこう，などと殊勝なことを考えたのだ。」（p. 24）「図書館でぼんやりしていると，ふみさんがやってきて隣に腰をおろした。」（p. 98）といったシーンもある。

短大の「ゼミでは正岡子規をやっている。」「第一希望の児童文学に，見事にふられてしまった」（p. 26）ということだが，同時に，司書資格取得コースを受講しており「『図書館通論』の授業中」（pp. 77–79）のシーンがある。

図書館学の授業については「先生には申し訳ないのだが，はっきり言って図書館学なんて退屈以外の何ものでもない。」「本を読むことは大好きな私だが，その愛すべき本達を分類する作業が，これほど繁雑で多岐にわたる知識を要するものだとは夢にも思わなかった。物事を理論的に分類し，整理する，というのはやはり根本的に私には向いていないらしい。」とあるように，積極的な関心はもっていない。

したがって，受講態度も，好きな授業は「最前列のど真中に陣取って，目をらんらんと輝かせて受講している。」「それが図書館関係だと，無意識のうちに最後列とまではいかないが，じわっと端っこの席に座ってしまう。我ながら，まことに正直な生き方である。」「『図書館通論』の授業でも，一番窓辺の席に座り，開け放した窓から入ってくるさわやかな風に前髪をあおられながら，うららかに講義を受けていた。」昼食のあとで，眠気を感じていたが，友人から写真をみせられて眠気が吹き飛ぶという展開になる。

司書資格を取得しようとした動機については「理数系をとことん排斥し，文系をこよなく愛した結果，現在の学校に入学してきた私である。その動機は純粋に文学を学びたいが為であって，別に司書資格取得コースをわざわざ受講する必要は無かった。けれど履修登

録の際，ちらりと姑息，かつ実際的な考えが頭をよぎったのだ。つまり，取れる資格ならば取っておいた方が，就職の際に若干有利に働くのではないか，と。」「だから入学案内のパンフレットなどをひもとき，図書館員なんていうのもヒマそうだし好きな本に囲まれているし，私にぴったりの仕事じゃないか，などと太平楽に考えていたものである。」「かくして諦めの良い私は，就職の際に提出する履歴書にたった一行『司書資格有り』と記入する為だけに，図書館学の授業に精励しているのである。『資格・免許』の欄が空白であるよりは幾等かマシだろう，という程度の実に消極的な理由である。」とあるように，積極的なものではなかったことが述べられている。

就職については，「そう遠くない未来に待ちうけている就職活動に関しては，いかにも漠然とした展望しか抱いていなかった。ほんのときたまだが，これでいいのだろうかと不安になったりもした。」「現実はそう甘くはないのである。大体，図書館員なんて定員がごく限られているし（失礼な言い草ながら）一度なってしまえばなかなか辞めないので，新規募集が非常に少ない。どこそこの市立図書館で，一名の欠員が出たところへ二百名以上も応募者が殺到した，などという話を聞いただけでげんなりしてしまう。」と，司書資格を生かしての就職はほとんど考えていない。また，友人が教職課程を受講しているのと比べても「彼女の教員免許取得への熱意は，私の司書資格取得にかけるそれとは比べ物にならない。比較することすら，はばかられる。」とあり「教師になるために通過しなければならない門の狭さは聞き及んでいた。ことに私たちのような短期大学卒業見込み者にとっては尚更で，我が校はここ二，三年というもの，教員を輩出していないのである。卒業生のほとんどが，いわゆる<平凡なOL>というやつになっていた。」（p. 169）のが現状であることも理解している。

『魔法飛行』は，『ななつのこ』の続編で，短大生「入江駒子」が活躍する連作短編集である[5]。

彼女の行動パターンが図書館と関係する場面は「図書館で借りてきたハードカバーの本」（p. 11）「図書館で貸出し券作ったり」（p. 12）「学校の図書館で借り出した日本語版」（p. 16）「図書館で時間つぶしてればいい」（p. 47）「待ち合わせ（中略）日曜日の図書館」（p. 69）「ここ（引用・注：市立図書館のこと）でコピーしていくから」（p. 105）などがあり，日常生活の中で，学校（短大）の図書館や市立図書館を，多様な目的で利用していたことがわかる。

この作品で，駒子は差出人不明の手紙を受け取り，そこには「あなたのことなら，大抵のことを知っています。生年月日や家族構成，学校のこと，そして今どんなことに興味を持たれていて，どんなことを考えているか，なんていうこともです。」（p. 61）と書かれている。同じ筆跡で書かれていた二通目にも差出人の名前はなかった。三通目の手紙には差出人が「坂口亮」と書かれていて，その内容には自殺をほのめかしていると考えられる部分があった。

手紙のことを調べていくうち，学園祭のときに受付にいた駒子をずっとみていた「二十七，八歳の，おどおどした印象を与える男の人。」（p. 221）がいたことを友人からきかされる。また，駒子の方は「坂口亮」についてまったく知らないのに，相手はよく知っている。不安になった駒子は，シリーズを通して「よき相談相手で，天文好きの聡明な青年」である瀬尾さんに相談する。「『いったいどうやって，君に関するあれだけのデーターを集めたんだろうね。君の住所や生年月日，学校や家族構成なんてやけに個人的なことをね。しかもそれだけじゃない，君がどんなことに興味を持っているか，どんなことを考えているかまでよく知っている』（中略）『図書館だって，言うんですか？』『少なくとも，そうした場所の一つには違いないよね。』」（pp. 237–238）という会話があり，図書館でなら，駒子についての基本的なデーターは，最初に貸出券を作る段階である程度手に入れられる，家族構成については，家の電話番号を入力して，同じ番号で登録している利用者の名を検索できる，などの推測がなされる。「『後で誰かが，同じ本を読んで，同じ写真や絵を見ていたとしたら』『それは一種の追体験とは言えないかい？』」「『もし，ある人間の読書傾向をずっとトレースできたら，その人が考えていることや，興味を持っていることなんてのは，全部とは言わないまでも，かなりの部分は分かってしまうんじゃないのかな』」（pp. 238–239）という推測から，二人は図書館を尋ねる。

ここで対応するのは「陽気でおしゃべりで親切な司書」（p. 244）と描写されている図書館員である。「『あのう……』私は相手に近づき，書架の陰から恐る恐る声をかけた。彼は両手に本を抱えたまま，『はい？』とふりかえった。『何かお探しですか？』愛想よく，そう聞いてくれる。目当ての本を自力で見つけられない，あるいは自ら探す意志のまったくない利用者には，慣れ切っているような口調と態度だった。事

務的な誠実さで，私の次の言葉を待っている。」「私は思わず相手の顔をまじまじと見てしまった。にきびだらけのその顔に，怪訝そうな色が浮いてくる。この人ではない。ふいにそう悟った。」（p. 242）とあるように，この人は手紙の差出人ではなかった。駒子が，「坂口亮」について尋ねると，「『坂口さんのマドンナでしょ，君』いきなり砕けた口調に」なり，駒子が図書館にやってくるたびに，意識して「『君が来ると変にそわそわしだすし，怪しげな行動も多かったし。あの仕事熱心な坂口さんがだよ，なんかこう，上の空になっちゃうわけ』」（pp. 242–243）と話している。その日，坂口は用事があると図書館を早退したことを告げ，駒子に尋ねられて彼の住所を教える。

駒子は図書館で聞いた住所をたよりにアパートを訪れ「坂口亮」の妹と出会う。彼は十年以上も前に大学生だった頃トラックに轢かれそうになった子どもを助けたことがあり，「『わんわん泣きだしたその子の手を引いて，家まで送ってあげたそうよ。その女の子の胸には，近くの小学校の名札がついてて，兄さんたらその名前をしつこく覚えて』」（p. 255）いたことを，妹から聞き出す。その後，図書館で働くようになって，昔，助けた女の子と再会し，その女の子が駒子だったということが判明する。その後，駒子たちは，「坂口亮」の自殺を阻止すべく行動していく。

なお，司書に関係した授業については「私の取っている司書資格取得コースで，英文タイプが必修科目だった」「英文の図書カードを作成する必要」（p. 130）があり「授業が始まってみると，これがどうもあまり順調とは言えないのだ。」「前々から，ひょっとしたらと思い思いしていたのだが，どうも私は人よりも若干不器用なのかもしれない。」（p. 130）と感じ，英文タイプ部に入部したことが紹介されている。

『スペース』は，「入江駒子」が登場するシリーズの第三作で，「e–NOVELS」で販売され，『週刊アスキー』にも連載された[6]。

この作品は，駒子が短大の友人から預かった手紙が，大きな部分を占めている。手紙の差出人は駒子ではないが，その中で描かれる短大での生活の様子は，司書の資格を取ろうとしている，英文タイプ部に入部している，など駒子の状況と似ている点も多い。しかし，細かい点では違っている部分もある。

図書館と関連のある描写では，県立図書館を見学したことについて「行ってみてつくづく思ったのは，図書館なんて大勢でぞろぞろ行くところじゃないなあってこと。当たり前だけど，興味ある本を手にとって眺められるわけじゃなし，図書分類カードなんて見せられてもねえ……と，司書を目指す学生とはとても思えないことを考えてしまいました。」「結局，見学で一番感銘を受けたのが，火災時の」ガスによる消火システムであることを紹介し，それを夢にまで見てしまうことが書かれている。（連載第6・7回）

司書資格のための授業については「でも正直言って，図書館学って退屈です。図書館は好きだけど，カリキュラム組むとき，『なんじゃこりゃ？』って言うような科目名ばかり並んでいて，そのときからすでにうんざりしていたような気がします。」レファレンスの例題については，「そんなのどっちだっていいじゃないのよ！なあんて思う私は，とてもじゃないけど真面目で優秀な図書館員にはなれそうにないのでした。図書館との正しい関わり方は，利用者としてに限るのかもね，私の場合。」とあり，この部分の書き手は駒子ではないのだが，図書館学の授業に着いては，駒子と同様の印象が語られている。（連載第6回）

このシリーズのメインキャラクターである「入江駒子」について，『魔法飛行』の作品解説で「駒子は，まだ新しい加納さん自身の生き生きとした残像なのだ。」と有栖川有栖は述べている[7]。また，加納朋子自身は，インタビューにこたえるかたちで，「駒ちゃんていうのは私にすごく近いスタンスで書いているんですよ。家族構成ですとか短大に通っていた状況なんかはほぼ同じなんですね。」と述べている[8]。したがって，司書資格のために受講している授業についても，自身の体験や，身近な友人からきいた話などを参考にしていることが考えられる。

「先生には申し訳ないのだが，はっきり言って図書館学なんて退屈以外の何ものでもない。」（『ななつのこ』）「でも正直言って，図書館学って退屈です。」（『スペース』）という表現には，司書課程の受講生の多くが賛意を示す可能性があるかもしれない。図書館を利用するがわとしては，駒子は多様な利用の仕方をしているし，『スペース』の手紙の書き手も「土曜日は講義はないから，その日は私，近所の図書館に行っ」たことを書いている。（連載第7回）いわば，図書館の利用者としては，十分に図書館の機能もサービス内容も認識している，そうした学生に「図書館学は退屈」と決めつけられてしまっているわけである。

資格をとっても図書館への就職がむつかしいことは，「一名の欠員が出たところへ二百名以上も応募者

が殺到した」ケースが『ななつのこ』でもふれられているが，そうした状況は現在も続いており，不況による自治体財政の悪化によって，さらに就職が困難になってきているのが実情である[9]。実際の就職につなげることが容易ではない状況のもとでは，現実にも「就職の際に提出する履歴書にたった一行『司書資格有り』と記入する為だけに，図書館学の授業に精励しているのである。『資格・免許』の欄が空白であるよりは幾等かマシだろう，という程度の実に消極的な理由である。」（『ななつのこ』）という意識で受講している学生は，相当程度存在していると思われる。これは，司書養成教育のかかえている構造的な問題であり，その改善のための努力が必要であろう[10]。

また，図書館員が，利用者の個人情報を私的な目的に利用するストーリーが作品に描かれている（『魔法飛行』）。「坂口亮」という図書館員が，駒子に対して，ストーカーまがいの行為をしているくだりは，彼が，子どもの頃の駒子を交通事故から助けたことがあり，また自殺をほのめかしているのは妹のことを心配するあまりのことである，という点を考えても，図書館のイメージにとって好ましいものとは言えない。

3．若竹七海と図書館

若竹七海は，1963年，東京生れ。立教大学文学部史学科卒業，同大学のミステリクラブ出身である。編集プロダクション，アクセサリー会社，業界紙等に勤務した後，『ぼくのミステリな日常』（東京創元社）で，1991年にデビュー[1]。その後も，コンスタントに作品を発表しつづけている。

若竹七海の作品について，図書館がストーリーに関係するものを，次の四つのパターンにわけて考える。

a．主要な登場人物が図書館を利用するストーリー

b．主要な登場人物と関連のある人物が図書館の司書であるストーリー

c．高校の図書館が舞台となっているストーリー

d．その他，図書館と関連のある状況が描かれているストーリー

a に該当する作品は以下のとおり。

a–1『ぼくのミステリな日常』1991，東京創元社[2]

この作品は「中堅どころの建設コンサルタント会社」（pp. 5–6）の社内報に連載される連作短編小説の体裁をとっている[3]。その「匿名作家による連作短編小説・五月」の中で，「ぼく」は「仕事をはじめて三年目に過労から喘息にかかった。」「あまり職場に未練はなかったし，きっぱりと仕事をやめ，とりあえず三か月間はのんびりと療養することにした。」（p. 34）「晴耕雨読ならぬ晴撮雨読をこころがけているぼくは，雨のなかを歩いて三駅先の図書館に行った。平日の雨の図書館は気持ちのいいほどすいていて，ぼくは席を一つ取っておいて実に気ままに，普段は手も出さないジャンルの本を抱えてきて，あれこれ楽しんだ。」（p. 49）とある。彼は図書館で，図鑑をみてある植物について調べるのだが，それが事件の深層を推理するきっかけになる。

a–2『火天風神』1994，新潮社[4]

祖父江美那は大学生で，その父は大手の商社で取締役管理部長である。妹が交通事故の後遺症で難聴になり，「美那は図書館で聴力障害者用の資料を読みあさった。」「資料は美那にこれまで知らなかった，そのうえ考えてもみなかった様々なことを教えてくれた。」（p. 28）とあるように，聴力障害者が社会活動を行うための「補助器具・機械」「手話・読唇術」とそれらを教えてくれる公的機関の存在，などを図書館利用を通じて知る。美那は，手話を学ぶようになり妹とのコミュニケーションが復活する。

a–3『製造迷夢』1995，徳間書店[5]

一条風太は刑事で，「三〇やそこらで」（p. 67）「今日三一になった男の顔」（p. 171）とあるように，三十歳前後の男性である。彼は，過去の事件に関する新聞記事を調べるのに図書館へ出むく。「土曜日の図書館は，それでも受験シーズンたけなわの頃に比べるといくらかすいていた。一条は難なく席を見つけ，新聞の縮刷版を借り出しにカウンターへ向かった。『おや，一条さん。仕事ですか』顔見知りの若い図書館員が歯を見せて笑いかけてきた。」この図書館員については，「若いといってもそろそろ三十も半ばだろうに，髪をゴムでまとめ，キティちゃんのアップリケのついたアームカヴァーをワイシャツの袖のうえに着けるというきてれつな服装」をし「モルモット並に目立つ前歯に，サイダーの泡のような微細なピアスをつけていた。」（pp. 80–81）とあるように，ちょっと変ったところのある人物として描かれている。この図書館員に，「一三年前の新聞の縮刷版」を「六月から九月まで」出してもらい「ずっしりと重い縮刷版を抱え，一条は席に戻った。」（p. 82）とある。また，ピアスを「外すのを忘れてうちのとキスしちまってね。」（p. 80）という発言から，この図書館員は男性ではないかと思われる。

a–4『プレゼント』1996，中央公論社[6]

葉村晶（女性）が活躍する連作短編集である。「二十八年間の平凡な生活を続けてきたわたし」（p. 229）は，ある人物から，妻を尾行してほしいとの依頼を受けるが，「探偵事務所はやめた」（p. 230）という理由で断ろうとする。依頼人の妻（鳥羽メイ）は万引癖があり，葉村晶とは，中学の時に同級生だった人物である。

「その当時」（引用・注：葉村晶が中学三年生の二学期）「わたしは市立図書館の自習室で受験勉強に明け暮れていた。家には口うるさい母親と三人の姉がいた。勉強してるそばから，四人順番に『勉強してるの』と問い質されてはたまったものではない。学校の勉強が終わると，わたしはその足で図書館に向かった。」「今でも覚えている。とても寒い十二月のことだった。いつものように図書館でノートを広げたものの，悪寒がして集中できなかった。諦めて荷物をまとめ，駐輪場へ向かった。隣の敷地に新しい図書館を建設中で，激しい塗料の臭いがした。」（pp. 232–233）その，駐輪場裏のごみ箱の陰から「ふたりの男女がもつれあうように現れた。ひとりが鳥羽メイ（引用・注：転校してきた同級生），そして，もうひとりは，図書館の受付にたまに座っている，たぶん司書，だったのだろう。その男は，三十代前半ですら中年に見える世代の目から見たことをさっぴいても，自分の父親よりもさらに老けた男だった。」「あぜんとするわたしの目の前で，ふたりの口が重なり合った。あのときの衝撃を，どう表現したらいいだろうか。十五歳のわたしには驚異の出来事だった。」「わたしは転がるように逃げ出した。家に帰って吐き，熱を出して寝込んだ。二度と図書館で勉強する気にはなれなかった。」（p. 233）そして，その後五年間，中年以上の男性の顔を見ただけでぞっとなる，というほど衝撃をうけている。

a–5『クールキャンデー』2000，祥伝社（文庫）[7]

中学生の杉原渚が活躍する，夏休み直前の物語。彼女は「小遣いの大半は食べ物や飲み物代に消えちゃうんだけど，でも本は買いたい。学校の図書室は読み荒らしちゃったし，葉崎市立図書館は遠くて，借りるのはいいけど返すのが面倒。スティーヴン・キングの小説じゃないけど，図書館警察がいたらあたしなんか真っ先にぶち殺されてるよ。」（p. 38）という状況にある。

ある事件が起こり「翌日の火曜日，あたしは午前中に葉崎市立図書館に行った。新しい市長になってからは，経費節減だとかで図書館の予算も削られたらしい。ママがよく資料を探しに行くんだけど，最近は購入する雑誌の点数も減ったって，ぶつぶつ文句を言ってる。」「葉崎市立図書館はJR葉崎駅の北口，葉崎医科大学付属病院のずっと先にある。駅の南口，葉崎市の裾野にあるうちからはえらく遠くて，自転車でも三十分，下手すると四十分くらいかかる。だから，めったには行かないんだけど，今日は特別だ。」（p. 73）兄が疑われている事件を調べるため「あたしは葉崎図書館に行って，田所の事故――だか，殺人だか――の記事を探したってわけよ。夏休みのせいか，図書館はけっこう混んでた。自習室には満員の札が出てる。みんな，受験勉強の真っ最中なんだろう。平和でうらやましい。」「新聞を片っ端から読んだけど，どの記事も小さかった。」「わざわざ新聞を調べに来た意味なんか，全然ないじゃん。」（p. 77）図書館の階段で，同じ学校に通っている知り合いに出会い「やつが抱えてる本を見て，あたしは図書館行政を嘆きたくなったね。ガキに貸すなよこんな本。『大量殺人者の心理学』だってさ」（p. 78）という感想を抱く。

bに該当する作品は次のとおり。

b–1『八月の降霊祭』1998，角川書店[8]

渡辺司は，現在は，女流作家南澤秀子の秘書をしている。「彼が南澤秀子と知りあって，約一年になる。当時，司は多摩地区の図書館で司書として働いていた。その図書館は年に一度，人気作家を招いて講演会を催すのが恒例となっており，司はその企画を任され，小説家の南澤秀子をゲストとして招いたのだった。」（p. 13）彼についての友人の発言には，「『人と関わる仕事のほうがよっぽどあんたむきなのにさ。わざわざ図書館に勤めるなんて，変ってるよ』」（p. 14）とある。図書館での講演会のあとに，個人秘書になってほしいと申し出があり「あるトラブルが原因で図書館をやめ」個人秘書になる。「秘書の給料は司書時代の倍以上」（p. 15）という設定になっている。

彼に関するエピソードとして「本が好きで，一冊の本をもとめて古本屋を巡り回ったこと。」「浪人二年目で将来が不安で，それを忘れるために図書館に入り浸っていたこと。」（p. 340）などが紹介されている。

b–2『依頼人は死んだ』2000，文芸春秋[9]

「葉村晶」「性別・女，現在無職。以前は，長谷川探偵調査所という零細な探偵社に勤めていた。」（p. 9）という人物がヒロインの連作シリーズである。

葉村晶は『プレゼント』（a–4）と同一のキャラクターだが，この作品にはヒロインの友人として，「相場

みのり」という図書館職員が登場する。みのりは，婚約者が急死した件に関連して，自分の母親が彼に何を言ったのか探ってほしい，と葉村晶に依頼する。相場みのりの母親は「二十八にもなってやっと身を固める気になったと思ったら，子どもは作らないだなんて。どうかしてます」(p. 53)「就職先だって，まあ，あなた，もっと将来有望な男性がたくさんいる職場だってあるでしょうに，小さな町の図書館ですって。そのうえ司書のひとたちって，皆さん変ってますわ。化粧っ気はないし，お地味だし，本の話しかなさらないの。そのうえ，私が娘には早く結婚して孫を生んでもらいたいと申しましたら，そんなことは本人が決めることだ，なんて反対なさるんですのよ。いったいどんな本を読んだらあんなに身勝手になれるのか，参考のためにうかがっておけばよかったわ」(p. 54) と発言しているような人物である。

また，亡くなった婚約者の友人（男性）と葉村晶との会話で「『中央文化センターというのが3か月後にオープンの予定で，（中略）地方自治体の文化センターだから，財団法人作って市役所の組織とは分離独立することになる。世の中の流れを見ても，それはあたりまえのことですよね』『ええ』『ところが，そうは思わなかった人たちがいる。財団法人に組み込まれる図書館の司書たち――みのりさんもその一人ですが――で，ほら，司書って利用者の秘密を守ることに関してすごくうるさいじゃないですか』『当然でしょうね』『法人化された図書館の司書は地方公務員ではなくなるわけだから，公務員法の適用がどうとか，このところもめているらしいんですよ。（中略）図書館が財団法人に組み込まれることなんか三年も前にわかっていたことだし，議会の承認も受けた，そのあとになって騒ぎ出すなんてって。だけど，司書ってもともと浮世離れした連中なんだから，しかたないですよね』」といったやりとりがある。「どんな温厚な司書でも，スパッツを穿いた男に浮世離れよばわりされたら，砂利道に座らせ，膝の上に国会図書館蔵書目録を積んでやりたくなるだろう。」(pp. 60–61) という葉村晶の感想が加えられている。

相場みのりは，職業を聞かれ「図書館司書です。でも，仕事でも趣味としてでも読書は好きですね」(p. 230) と発言している場面がある。また「都庁の会議室で都内図書館司書連絡協議会の総会が」(p. 300) 行われているとの記述もある。

b–3『悪いうさぎ』2001，文藝春秋[10]

「国籍・日本，性別・女，年齢・三十一歳。数年前から長谷川探偵事務所という小さな探偵事務所と契約している，フリーの調査員」「調査員として三年間勤めた後，長谷川所長の勧めもあって自由契約に落ち着いた」「葉村晶」(p. 8) を主人公とするシリーズの最新作で長編。このシリーズの前作同様，友人で図書館に勤めている「相場みのり」が登場する。調査中にけがをした葉村晶を見舞った際に「図書館勤めということもあって，寒色系の作業着はかり着ている女が，今日は薄紅色のワンピース姿だ。」(p. 24)「『うちの図書館に来て，調べ物手伝ってあげたらお茶に誘われて。メール交換するようになって，一度一緒に食事をしたってだけでさ』」(p. 26) とあるように，みのりは三十代の歯科医師との交際をはじめる。「都庁で図書館連絡評議会の会合があった」(p. 57) あとに，葉村晶の部屋に立ち寄り「『七，八回ほど食事をしただけ』」と言いつつ「三時間以上ものろけ」(pp. 58–59) て帰っていく。しかし，この交際相手は，結婚詐欺の前科があり，自分のつきあっている女性について，ホームページで人権を侵害するような内容まで公開してしまう人物だった。彼は「頭でっかちでプライドの高そうな女がひっかかりそうな男」(p. 181) と描写されており，そのホームページには「アイバミノリ（仮名）って，図書館の司書やってるお硬い女」(p. 217)「自分の過去とか語っちゃうタイプ」「婚約者に自殺された」(p. 218) といったことまで書かれていた。

また，葉村晶が，調査のため「御苑近くの図書館に行くことを考えたが，そろそろ閉館する頃だろう。」(p. 101) とあり（前後の文章から，このときの時刻は夕方5時前後と思われる），別の日に「下落合の新宿区立図書館に寄って，一九八〇年の新聞の縮刷版を」(p. 192) みて，調査対象の人物の過去について調べるシーンがある。

c に該当する作品は次のとおり。

c–1『水上音楽堂の冒険』1992，東京創元社[11]

都郊外の新国市にある私立新国南高等学校が舞台である。学園で起きた事件について，生徒たちが話しているところへ通りかかった末松先生は「五五歳になったばかりの女性教師」「つきあいの浅い生徒たちには敬遠されている」「『冗談の多少きついところもあるおかしなおばちゃま』」(p. 150) で，「『みな学園ミステリーの読みすぎのようですね。図書館にあんなに揃っているのだから，無理もありませんが』」(p. 151) と発言し，どこへ行くのか尋ねられた彼女は「『図書館で調べものです。』」(p. 152) とこたえている。「午前

中の図書室には二，三人の生徒だけがいて，それぞれに教科書とノートを広げている。末松は，図書室の貸出カウンターの裏にある，細長い準備室に入ってい」（p. 155）くと，そこでは，男女の生徒が逢引しており，先生は「避妊しているんでしょうね」（p. 156）と問い質すが，「男のほうがおどおどとうなず」（p. 157）くとそれ以上の追求はしない。

c–2『スクランブル』1997，集英社[12]

中等部・高等部の一貫教育を柱とする私立の女子高校，新国女子学院を舞台とするストーリーである。「新国女子学院の校内は五つのゾーンに分かれて」いて「北側は七万冊の蔵書を誇る図書室」（p. 25）がある。

主なストーリーが，女子高校の文芸部員を中心に展開し，彼女たちが学校図書館をひんぱんに利用しているため，図書館が登場するシーンも数多くある。

「図書室のカウンターに肘をつき読み耽っていた『チボー家の人々』から，沢渡静子は顔をあげた。七月の第三週。午後三時。期末試験も終わり，梅雨も開け，図書室には他に人けもない。こんな時期に図書当番なんて，うんざりして当然だ。風通しの悪い暑苦しい図書室のなかで，埃臭さに窒息しそうになりながら，制服のブラウスに汗じみをこしらえて，ひたすら時計をにらんでいる」（p. 138）「新国女子学院の自慢のひとつが，この蔵書七万冊の図書室だった。もっとも，多く利用されているとは言い難い。ひまつぶしに利用者カードを調べたら，現在高等部で本を借り出しているのはわずか四十人ばかり。約千人もの生徒がいて，これである。その四十人のなかに，自分も所属している文芸部の部員が残らず含まれているのには，思わず笑ってしまったが。」（p. 139）「しんとした図書室にはしかし，本たちの気配が濃厚に漂っている。」「ひとりきりで，図書室を占領している気分は，悪くなかった。いつか，この本たちのなかに自分の作品が入る。それは誰にも言ったことのない，言えるはずもない，沢渡の夢だった。書くべきことを持たないいまの自分の，妄想に近い，将来の夢。だがひとりで本のなかにいると，ありうべき夢のように思えてくる。」「七万冊の宇宙が，いま，あたしの周りをまわっている。おや，これは詩になるかもしれない。」（p. 140）「図書室は白々とした沈黙に満たされた。七万冊の本はびくとも動かず，それでいて圧倒的な存在感でふたりを押し包んでいる。」（p. 234）など，学校図書館としては規模が大きく，広い空間に膨大な資料が所蔵されているが，実際に図書館を利用したり，本を借り出したりする生徒はそれほど多くはないという，この新国女子学院の，特徴のある図書館の状況が描かれている[13]。

主要な登場人物の中で，図書館で仕事をするようになるのは「飛鳥しのぶ」と「信川先生」である。

飛鳥しのぶは「白皙の美女で，学期末に発表される学業優秀者に名前があがらなかったことがない才媛でもある。」が「どうにもテンポがとろい。」（p. 15）とされている。

高校時代には，弁護士や福祉関係の仕事を考えたこともあったが，結局「飛鳥本人は新国女子大学の日本文学科に進学し，司書の資格をとって地元の図書館に就職した。」（p. 220–221）とある。

彼女は，高校時代に，ふだんは本を借りたりしないような生徒が，たくさん本を借りていることについて「『鹿島さんは二年生に進級してから，急に髪の毛に気を配るようになった。夏見さんがそう言ってました。本が痛み出したのも，鹿島さんが本をたくさん借りるようになったのも，この四月からでしょう。それで，思い出したんです。姪っ子が本をくるくる巻いて，遊んでたことがあったんです。』」「『髪の毛ですよ。あのね，雑誌で見たんです。髪を湿らせて，いらなくなった薄い雑誌とかに挟むんです。で，雑誌をくるくる巻いて，輪ゴムで両はじを留めておくんです。で，一晩置くと，髪がカールできるんです。この方法は，けっこう便利なんですよ。』」（p. 171–172）と，カーラーの代わりに図書室で借りた歌集を使っていたのではないか，ということを推理している。

信川先生は「小柄でやや太めの身体」（p. 8）で，古典文法の補習授業を担当している。「司書の資格を持って」「図書館準備室を居場所に」（p. 258）している。その後「本格的に図書室専任の司書として働い」（p. 260）たあと，学園を去り，「いまでは先生ではなく，司書の先輩になっていた」（p. 221）とあり，「飛鳥と同じ司書という職業」（p. 257）に転職することになる。

小説の前半では，国語教師として，古典の補習授業をしている場面もあるが，その後は「貸出カウンターのなかには図書準備室への出入口があって，信川先生はそこから現れたのだった。彼女は笑って，抱えていた薄い本数冊をカウンターに置き，コーヒーでもどう，と言った。」（p. 140）「『準備室で本の手入れをしてたのよ。最近，なんだか歌集のいたみが激しくって。』」「『本の手入れに人手がいるんだけど，これはコツがあるから先生が自分でやります。誰もがあなたみ

たいに本を大切に扱ってくれれば，いいのに』」（p. 141）など，高校の図書館の事務を担当していることを示すシーンもある。また，「『そうだ，やってもらうことがあるわ。この学期内にいちばん多く本を借りた生徒を調べておいてくれないかしら』」（p. 142）と言って，学校図書館からの貸出冊数を調査して報告するよう，生徒に依頼している。

彼女は，婚約者をめぐるトラブルから殺人を犯してしまうが，結局，しのぶが先生をかばって証言をしなかったために，十五年で時効が成立する。

d に該当する作品は次のとおり。

d–1『心の中の冷たい何か』1991，東京創元社[14]

探偵役の女性が，会社の資料室に勤務する男性と「『資料室ってどんな仕事するんです？』『データの収集と解析。脚で拾ったデータじゃないよ。新聞雑誌，その他メディアに載った資料を集めておく，まあ企業の私設図書館みたいなもんだ』早い話が閑職というわけだ。」（p. 68）という会話をする部分がある。

d–2『閉ざされた夏』1993，講談社（第三十八回江戸川乱歩賞の最終候補作品を加筆・訂正し改題したもの。）[15]

文学者の記念館を舞台とする作品で，主人公の佐島才蔵は「嘱託学芸員」である。「大学で学芸員課程を履修したのはいつか博物館か美術館で働いてみたいと思ったからではあった」「学芸員としての働き先は数が少ない。」（p. 16）という部分がある。

d–3『海神（ネプチューン）の晩餐』1997，講談社[16]

「タイタニック」や「氷川丸」の船が舞台であり，その描写に「図書室」（p. 12）「読書室」（p. 107・p. 225）が出てくるほか，冒頭のページにある氷川丸のイラストには，一等船室のならびに「読書室」が描かれている。

d–4『名探偵は密航中』2000，光文社[17]

舞台となる「箱根丸」の乗客の描写に「図書室から持ち出した」（p. 88）「持参の本を読み尽くし，図書室の雑誌にも目を通し切っていた。」（p. 127）などの表現がある。

また，小説以外の例として，単行本では，次のものがある。

d–5『船上にて』1997，立風書房[18]

「あとがき」で，若竹七海は，自身と図書館との関係について，自分が短編を書いている際は，実際にワープロに向かっている時間は少なく，不意に海外の作家の本を「『図書館行って，調べてこようっと』と，仕事とは関係ない調べ物に血道をあげ」（p. 251）たりすることがあると述べている。

若竹七海には現在までに，単行本として刊行された作品が20点近くある。その半数以上になんらかのかたちで，登場人物が図書館を利用したり，図書館や図書館員が関係するストーリーが含まれている。最近の図書館をとりまく状況を反映させているものとして，地方財政事情の悪化とそれにともなう図書館資料費の削減（『クールキャンデー』），図書館員から作家の秘書に転職することで収入が増える（『八月の降霊会』）民間委託とそれに対する司書の抵抗（『依頼人は死んだ』）などがある。また，図書館でのラヴシーンが描かれている作品（『プレゼント』『水上音楽堂の冒険』）もある[19]。

4. 日本の女性ミステリ作家と図書館

ミステリの中での図書館の描かれ方について，

a. 図書館を誰（年齢・性別・職業別）がどのような目的で利用しているか

b. 図書館員がどのように描かれているか（利用者への対応・仕事に関する意識など）

のふたつの側面から考えることにより，その作家が図書館や図書館員をどのように認識しているかを，ある程度，推察することができる。

a について，加納作品では，「本を借りる」「待ち合わせ」「ひまつぶし」「調べもの」「コピー」など，短大生の「入江駒子」は多様な利用の仕方をしている[1]。「美術館も好きだけど，やっぱ図書館が一番かな。それでもって，二番目は古本屋。」という発言もあり，図書館を十分に活用している様子が見て取れる[2]。

若竹作品では，調べもののために利用しているケースが多い。失業者が植物について調べる（『ぼくのミステリな日常』），大学生が難聴について調べる（『火天風神』），刑事が過去の新聞を調べる（『製造迷夢』），中学生が新聞を調べる（『クールキャンデー』）高校の先生が学校図書館で調べものをする（『水上音楽堂の冒険』），などがあり，他には，中学生が受験勉強をする（『プレゼント』），学校図書館から生徒が本を借りる（『スクランブル』）などのケースが描かれている。

b について考える前提として，図書館の職員に関して，「司書」という呼称が，「資格」と「職名」の両方の意味に用いられているという現実をふまえておく必

要がある。専門職としての「司書」が社会的に十分に認知されていない日本では，「資格」と「職名」との間に混乱がみられるのが現状である。テレビドラマ『ビューティフルライフ』を扱った際にもふれたが，東京23区では，「司書」という職名はすでに廃止されている[3]。他の自治体でも「司書」として，独自の採用・昇進体制がとられているところは多くないのが現実の状況である。

加納作品では，「司書」は資格を示すものとして使われているケースが多い。職員については「図書館員」「図書館の人」が使われ，例外（「陽気でおしゃべりで親切な司書」『魔法飛行』）もあるが，ほとんどは，資格の意味で「司書」が使われている。

資格としての「司書」を取得するために必要な図書館学の授業は退屈なもの（『ななつのこ』『スペース』）であり，ヒロインに対してストーカーまがいの行動をとったり，自殺をほのめかす手紙を出したりする人物が図書館員で，「超真面目」「堅物」「仕事熱心」「完璧主義」だが「おどおどした印象を与える男の人」（『魔法飛行』）と描写されている。

若竹作品で「図書館の受付にたまに座っている，たぶん司書，だったのだろう」（『プレゼント』）「多摩地区の図書館で司書として働いていた」（『八月の降霊祭』）「小さな町の図書館ですって。そのうえ司書の人たち」「図書館司書です」（『依頼人は死んだ』）などは，職名の意味で「司書」という言葉が使われている。また『スクランブル』では学校図書館が舞台であり，「資格」と「職名」の双方の意味で「司書」という言葉が使われている。

若竹作品の中に登場する図書館員は，「そろそろ三十も半ばだろうに，髪をゴムでまとめ，キティちゃんのアップリケのついたアームカヴァーをワイシャツの袖のうえに着けるというきてれつな服装をしている」「若い図書館員」（＝男性『製造迷夢』），利用者の中学生とキスをしていた「図書館の受付にたまに座っている，たぶん司書，だったのだろう」（＝男性『プレゼント』），作家の秘書に転職する「多摩地区の図書館で司書として働いていた」（＝男性『八月の降霊祭』），「司書のひとたちって，皆さん変ってますわ。化粧っ気はないし，お地味だし，本の話しかなさらない」（＝女性『依頼人は死んだ』），殺人を犯してしまう教師（のちに司書に転職）とそれをかばう生徒（＝双方とも女性『スクランブル』），などのように描写されており，男性・女性とも，ちょっと変った人物として描かれているケースが目につく。

今回取り上げたふたりの作品において，図書館に関わる記述内容は，現実の姿を反映している部分が多くある。図書館を利用するがわとしては，本を借りる，調べものなどをはじめとして，さまざまなかたちで図書館を利用する状況が描かれており，これは図書館利用が増加し多様化してきている現実とも符合している。一方で「司書」や「図書館員」についての言及も数多くあるが，こちらは，必ずしも魅力的な存在として描かれてはいない。実際に公共図書館での専門職員の配置については，必ずしも社会的な合意が得られているとは言えない状況にあり，そのことは司書養成課程にも影を落としている[4]。

利用者のプライバシーの扱いに関しては，利用者の個人情報を私的に流用する（加納『魔法飛行』），学校図書館で利用記録を本人以外の生徒が見る・利用状況の調査を生徒に依頼する（若竹『スクランブル』）など，両者の作品とも，必ずしもプライバシーが守られていないことを思わせるエピソードが作品中に見られる。今回取り上げた，若手の女性ミステリ作家の作品にも，こうした内容が含まれていることは，「図書館の自由」の問題，中でも，図書館が利用者のプライバシーを守ることを原則として重要視していることが，社会的に広く認識されるにいたっていないことの一端を，あらわしていると思われる。

5. おわりに

2001年秋に放映されたトヨタ自動車のテレビCMに，森高千里がCD-ROMを手にして「ちっちゃな図書館だね」と話しているシーンがある[1]。また，明治製菓の人気商品「Fran」のCMはパリ国立図書館で撮影されたと報じられている[2]。これらは最近のメディアに登場した日本のトップメーカーの事例で，メインのキャラクターはいずれも女性である。冒頭に紹介した樋口一葉の時代から，社会的な環境は大きく変化した。そして，女性と図書館との関係も，また，メディアの中に登場する図書館・図書館員と女性との関係も，同様に大きく変ってきている。

この点に関して，早田リツ子は「女性の読書環境は大きく変った。」「社会状況の変化が背景にはあるが，『あらゆる住民を大事に考える図書館』ができることによって，はじめて可能になった変化でもある。」と述べている。さらに，滋賀県での女性司書の状況にふれ，「図書館でも，もし正規職員の採用が押さえられて嘱託・臨時職で充当すれば更に『女性の職場』化が

進むだろう。」「一般に浸透しつつある『明るく親切で親しみやすい』図書館イメージが，実は従来の女性観が示す『女性性』に符合しているのである。」「図書館業務全般に対する住民の認識不足（貸出し＝単純作業というような）が，いっそう『女性の職場』のイメージを拡大しているように思われる。」と述べて，職場としての図書館に女性が進出することと，そのことによって引き起こされる図書館業務のイメージの矮小化について懸念を表明し，問題点を指摘している[3]。

また，最近刊行された『図書館界』（日本図書館研究会の機関誌）300号記念特集は，「図書館・図書館学の発展――21世紀を拓く」というタイトルになっている。この中で，渡辺重夫は，図書館での利用者のプライバシーの扱いに言及する中で，図書館利用者の秘密を守ろうとする図書館側の主張がどれくらい説得力をもつかは「図書館利用者の秘密の意味が一般の人々の間で，どれくらい強く意識されているかによって，影響される」[4]という後藤昭の見解を紹介しながら，「図書館利用者のプライバシー権に対する社会的認知度を高めることの重要性を改めて知る思いである。」と述べている[5]。同特集号で，山本順一は「わが国において，図書館と著作権制度の関係が円満に詰められない背景として，ときに生涯学習社会の拠点施設ともてはやされながら，その実，その本質的な社会的機能についての国民的合意がなされていないことがある。」と指摘している[6]。

図書館のイメージは，「図書館利用者のプライバシー権に対する社会的認知度」や，図書館の「本質的な社会的機能についての国民的合意」などと密接な関連がある。それは「図書館はどうみられてきたか」という事実を反映したものになっていると考えられ，また，実際の図書館活動の支持基盤となる住民の意識構造とも深く関わっている。図書館について，その社会的な存在感を定着させていくためにも，「図書館はどうみられてきたか」というアプローチからの分析を進めることで，現実の図書館運営と密接に関係すると思われる，人々の図書館に対する認識について，さらに解明を続けていきたいと考えている。

注

1．はじめに

1）西尾能仁『全訳　一葉日記　第一巻』1976，桜楓社，pp. 76–77

2）同上，p. 84の脚注

なお菅　聡子『時代と女と樋口一葉』1999，日本放送出版協会，pp. 101–104，では女性の図書館利用者が少なかった明治20年前後の状況が紹介されている。

3）佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか　日本のミステリと図書館員－東野圭吾・法月綸太郎のケースについて」『甲南女子大学紀要』vol. 36, 2000. 3, pp. 155–179

4）佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討－図書館はどうみられてきたか・2」『甲南女子大学紀要』vol. 37, 2001. 3, pp. 105–135

5）『図書館はいま　白書・日本の図書館1997』1997，日本図書館協会，pp. 36–41，には，日本の公立図書館状況が，1960年代後半以降に大きく変化していったことが，図書館数，設置率，貸出冊数，などのグラフによって紹介されている。

6）月刊誌『図書館の学校』にその一部が連載され，最近単行本として刊行された，小田光雄『図書館逍遥』2001，編書房，では，フィクションの作品と図書館が関係する事例を，数多く取り上げて紹介している。

2．加納朋子と図書館

1）加納朋子『ななつのこ』1992，東京創元社

2）加納朋子『ガラスの麒麟』1997，講談社

3）『ななつのこ』の巻末（pp. 253–254）に付されている「鮎川哲也賞」選評で，中島河太郎は「連作短編の形をとっているが，全体的な構成にも気配りがなされていて好感がもてた。」と述べている。

また，加納朋子『掌の中の小鳥』1995，東京創元社，pp. 231–234，には，赤木かん子による「解説」が掲載されている。そこでは，「そうかぁ……」「こういうのがいまの若い子かぁ……」「この本はヤング・アダルト文学，ではなく（たぶん）ミステリとして図書館では分類されるでしょう」「もしこの文がお目にとまりましたら図書館員のみなさん，ぜひこの本は，一般書の“カ”の棚と，ヤング・アダルト・コーナーの両方に一冊ずつそろえてください。」と述べられている。

4）加納朋子『ななつのこ』（前掲）

5）加納朋子『魔法飛行』1993，東京創元社

6）http : //www.e–novels.net/

また，『週刊アスキー』では，2000. 7. 25（第1回）から2000. 10. 17（最終回）まで，12回にわたって，連載された。

第1回『週刊アスキー』2000. 7. 25, pp. 52–55
第2回『週刊アスキー』2000. 8. 1, pp. 54–57
第3回『週刊アスキー』2000. 8. 8, pp. 54–57
第4回『週刊アスキー』2000. 8. 15, pp. 54–57
第5回『週刊アスキー』2000. 8. 22/8. 29, pp. 52–55
第6回『週刊アスキー』2000. 9. 5, pp.52–55
第7回『週刊アスキー』2000. 9. 12, pp. 54–57
第8回『週刊アスキー』2000. 9. 19, pp. 52–55
第9回『週刊アスキー』2000. 9. 26, pp. 62–65
第10回『週刊アスキー』2000. 10. 3, pp. 62–65
第11回『週刊アスキー』2000. 10. 10, pp. 62–65
最終回『週刊アスキー』2000. 10. 17, pp. 62–65

なお，本稿では，『週刊アスキー』に連載されたものをテキストとして参照した。

7）有栖川有栖「論理（ロジック）じゃない，魔法（マジック）だ」（『魔法飛行』の作品解説，pp. 271–278）には，駒子について「彼女は，作者，加納朋子さん（駒子は数年違いで作者を追っている）にちょっと手を引いてもらいながら，一緒に，ひたむきに，生きているという気がしてならない。駒子は，まだ新しい加納さん自身の生き生きとした残像なのだ。」とある。

8）山口雅也：監修，千街晶之・福井健太：編『ニューウエイヴ・ミステリ読本』1997，原書房，pp. 46–51，には，加納朋子の「ロングトーク・インタビュー」が掲載されている。その中で，加納朋子は，「入江駒子」のキャラクターのモデルについて，「駒ちゃんていうのは私にすごく近いスタンスで書いているんですよ。家族構成ですとか短大に通っていた状況なんかはほぼ同じなんですね。」と述べている。また，ファンからの反応について，「みんな図書館で読みました，とか（笑）。やっぱり年齢的に若い層の方はハードカヴァーを買わないですね。」としている（このインタビューは，1996年11月に行われたもの）。

『スペース』連載中に掲載された「e–NOVELS 通信 第1回　週アス好評連載中『スペース』著者　加納朋子氏にインタビュー」『週刊アスキー』2000. 9. 26, p. 66，でも「“駒ちゃんシリーズ”の3作には，加納さん自身の体験が，かなり反映されているんですか？」ときかれたのに対して，「そのままの部分がけっこうありますよ。」とこたえている。

9）司書資格が取得できる大学は，『日本の図書館情報学教育2000』2000，日本図書館協会，によると，大学・短大・講習，あわせて，200校近く（重複あり）ある。私立の四年制大学100校あまりのうち，約3割は女子大学であり，また，74校ある短期大学の在籍者の多くは女性であることからみて，司書資格取得のための課程を受講している学生の多くを，女性が占めていることが考えられる。

同書によれば，司書資格取得者が約11,000名であるのに対して，図書館等への就職者数は，「大学43校118人　短大31校82人」とされている。各大学・短大に送付された，質問紙の文章は，「平成10年度に司書・司書教諭の資格を取得した学生は何名ですか。また，そのうち図書館，あるいは司書・司書教諭資格を持っていることを条件とする職場に就職した者は何名ですか（わかる範囲でお答えください）。」となっている。したがって，必ずしも，正規職員としての就職に限定しておらず，就職者数には，嘱託・アルバイト・派遣職員としての雇用などが，相当程度，含まれている可能性がある。

『日本の図書館情報学教育1995』1995，日本図書館協会，には，司書資格取得者約10,000名に対し，図書館等への就職者数は「大学57校242人　短大53校160人」とある。

『日本の図書館学教育1988』1988，日本図書館協会，には，司書資格取得者約8,000名に対し，図書館等への就職者数は「大学85校208人　短大81校139人」とある。

『みんなに本を　図書館白書1972』1972，日本図書館協会，pp. 40–41，には，「毎年約2500名あまりの有資格者が生れる」が，公共図書館には120から130名の採用しかなく，「1，2名の採用試験に50倍，100倍の受験者が押しかける例も稀ではありません。」とある。

10）なお，現在は，シラバスの配布や学生の授業評価アンケートなど，授業内容に対するフィードバックの試みが，ほとんどの大学で実践されており，多くの大学教員が，自らの授業内容の改善に，常に取り組む姿勢を示していることは言うまでもない。

3. 若竹七海と図書館

1）若竹七海『ぼくのミステリな日常』1991，東京創元社

2）同上

3）逢坂　剛「ぜひ本文より先に読んでほしい解説」（『ぼくのミステリな日常』の解説 pp. 309–312）では，「形式は独立した十二本の短編集だが，それらが最後に全体の中で，ジグソーパズルのように一つの映像を描き出す。」と述べられている。

山口雅也：監修，千街晶之・福井健太：編『ニューウエイヴ・ミステリ読本』（前掲），p. 192に掲載されている『ぼくのミステリな日常』の書評では，「連作短編集－に見せかけた長編ミステリである。」とされている（この書評の執筆は千街晶之）。

4）若竹七海『火天風神』1994，新潮社

5）若竹七海『製造迷夢』1995，徳間書店

6）若竹七海『プレゼント』1996，中央公論社

7）若竹七海『クールキャンデー』2000，祥伝社（文庫）

8）若竹七海『八月の降霊祭』1998，角川書店

9）若竹七海『依頼人は死んだ』2000，文藝春秋

10）若竹七海『悪いうさぎ』2001，文藝春秋

11）若竹七海『水上音楽堂の冒険』1992，東京創元社

12）若竹七海『スクランブル』1997，集英社

13）全国学校図書館協議会編『データに見る今日の学校図書館　学校図書館白書3』1998，全国学校図書館協議会，によると，蔵書冊数の平均値は，中学校：8,307冊，高等学校：21,000冊（p. 11）となっており，この小説の舞台である新国女子学院は「中等部・高等部の一貫教育」校であるが，その蔵書数が約70,000冊というのは，平均値の2倍以上である。

また，同書によると，中・高校生が学校図書館から借り出す本の冊数は，ほとんどの学年で1ヶ月に平均1冊にも満たない（p. 42–43）とされているが，新国女子学院の利用は，そうした状況と比べても，多いとは言いがたい。

14）若竹七海『心の中の冷たい何か』1991，東京創元社

15）若竹七海『閉ざされた夏』1993，講談社

16）若竹七海『海神（ネプチューン）の晩餐』1997，講談社

17）若竹七海『名探偵は密航中』2000，光文社

18）若竹七海『船上にて』1997，立風書房

なお，現役のミステリ作家であり，文芸評論家でもある野崎六助は，『ミステリの書き方12講』1999，青

弓社，において，ミステリを執筆する際のプロセスについて説明する中で，「第4講　取材をいかにこなすか」において，図書館利用にふれている。「図書館利用には，三つのエリア分け」があり，「近所の図書館」「少し大型の図書館」「超大型図書館」それぞれの特徴と利用法を説明している。さらに「プラス・アルファのレベル」として「題材の現場に近い図書館・資料館」を利用することもケース・バイ・ケースで，必要になるとしている（pp. 63–66）。

19）テレビドラマでは，『あすなろ白書』（1993 フジテレビ）で放送された，図書館の書架のところで女性から男性にキスをするシーンや，『魔女の条件』（1999 TBS）での女性教師と男子生徒が学校図書館で一夜をあかすシーン，などが話題になったことがある。

また，図書館勤務経験のある，篠田節子「図書館随想」『三日やったらやめられない』1998，幻冬社，では，八王子市立中央図書館での大学生カップルのケースが紹介されている（pp. 128–133）。

4. 日本の女性ミステリ作家と図書館

1）加納朋子『魔法飛行』（前掲）p. 105，に，その図書館の蔵書ではない資料をコピーしようするシーンがある。また，「この間ここでいっぱいコピーした」p. 105 とあるが，「そのときコピーしてたのは」駒子が書いた「最初の話の原稿」p. 239 である。図書館でのコピーが認められているのは，所蔵資料に限定されていると考える必要があり，その図書館所蔵でない資料や自分が書いた作品などをコピーしようとしているのは問題がある。

2）同上，p. 69

3）佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討」（前掲）

4）『図書館年鑑 2001』2001，日本図書館協会，pp. 238–239，によると，1990 年から 2000 年までの間に，個人貸出冊数は約 2 倍（2 億 5557 万冊→5 億 0769 万冊）に増えているが，専任職員数は 1.17 倍程度（11,191 人→13,200 人）の伸びで，1998 年をピークとして，1999, 2000 年は，減少している。

5. おわりに

1）TOYOTA の「COROLLA SPACiO」の CM。

図書館員と思われる女性（図書館の建物の外壁が映り，その内部と思われる書棚のところで，CD–ROM を手渡しながら）「この棚の本，ぜ～んぶ，これ 1 枚に入っちゃうのよ。」森高千里「へぇ～。こんなに，ちっちゃいのに？」図書館員（うなずく）「うん」ナレーション（森高の声）「大は小を兼ねる，そんな発想は 20 世紀で終わりました。」森高（車の座席で，犬に CD–ROM をみせながら）「すごいねぇ～。ちっちゃな図書館だね。」ナレーション（森高の声）「小さいのに，大きなゆとり。」というストーリー。大型車ではない，普通車でも座席が広く，ゆったりと使えることを，アピールしている。

2）「“甘～い”オンナ　新 CM で菜々子アピール」『夕刊フジ』2001. 9. 15, p. 18，には，「女優の松嶋菜々子（二七）が出演する明治製菓のチョコレート『Fran』の新 CM 発表会が十三日都内で開かれた。CM は大人向けの商品イメージにあわせて，パリの国立図書館などで撮影。」とある。

3）早田リツ子「公共図書館と「女性」市民」『いま，市民の図書館は何をなすべきか　前川恒雄さんの古稀を祝して』2001，出版ニュース社，pp. 126–127

4）後藤　昭「図書館利用者の秘密と犯罪捜査」『現代の図書館』vol. 34, no. 1, 1996, pp. 40–56

5）渡辺重夫「図書館と知的自由」『図書館界』vol. 53, no. 3, 2001, pp. 191–200

6）山本順一「図書館と著作権」『図書館界』vol. 53, no. 3, 2001, pp. 355–363